

ともに育つ保育園に

前川良太

そう組では毎年就学前の懇談会の中で、小学校への引継ぎ資料を作成しています。こちらが保育園での生活の中で、特に子ども自身が表現できない心の内や、日々の生活の積み重ねの中でしか見えないことを中心に文章を作成します。それを基にこれまで共に過ごしてきた保護者たちの声を集めながら、引継ぎ資料に創り上げていきます。そんな懇談会の中で、保護者たちから口々にこんな声が聞かれました。「これ、悪口みたいに感じます。」続けて、「親として、否定されたような気持ちになります。」

その言葉は、攻撃的ではありませんでした。戸惑いと寂しさと、怒りが混ざったような、率直な声でした。私はすぐにどういう意図の引継ぎ資料かということは説明しましたが、どうにも届きませんでした。何だか見ている根っこが、こんなに長い時間をともにした親たちとすら、すれ違っている、そう瞬間的に感じ取りました。なぜ、子どもの姿を書いた文章が「悪口」に聞こえてしまうのだろう。そこには、私たちに深く染み込んでいる前提があるのではないか、そう考え始めました。



あの場に流れていたものは、単なる言葉の行き違いではありませんでした。私の説明が足りなかった、というだけでもない。目の前にいたのは、何年も同じ園庭で子どもを見つめ、ともに行事を創り上げてきた親たちです。運動会でともに感動し、けがをした日に一緒に心配し、行きつ戻りつの姿を共有してきた人たちです。その人たちと、同じ文章を前にして、見ている景色がずれてしまった。その事実のほうが、私には重く感じられました。そのずれは、個人の感受性の問題ではないように思えました。子どもを見る時、私たちは何を基準にしているのか。「育っている」とは、何をもちてそう言うのか。その物差しが、いつの間にか共通のものではなくなっている。いや、もともと違っていたものが、あの瞬間に浮き上がったのかもしれませんが。成長をどう見るか。発達をどう捉えるか。そうした見えない前提のずれが、あの場の空気をかたちづくっていました。だから私は、あの違和感を単なる「説明不足」として片づけたくありませんでした。あれは、私たちが生きている社会のまなざしそのものが、そこに顔を出した瞬間だったのではないか。そう考え始めたのです。



子どもの姿が文章になるとき、それはいつの間にか「評価」のように見えてしまう。できていることは賞賛、できていないことは指摘。その揺れや迷いや葛藤を書いているはずなのに、「欠点」や「改善点」のように読まれてしまう。その背景には、「発達」や子どもの「成長」という言葉を「能力の向上」とほとんど同じ意味で使ってきた社会の前提があります。どれだけできるようになったか。どれだけ周囲に追いついたか。そんな基準が、子どもを見るまなざしの奥に入り込んでいる気がします。けれど、現場で子どもたちと過ごしていると、「能力のグラフ」はきれいには動きません。昨日できていたことが今日はできない。言葉が増えたと思ったら、また黙り込む。その揺れや戻りの一つ一つに、意味があります。私がまだずいぶん若手の保育士だった頃、仲嶺前園長から「子どもの育ちは行きつ戻りつ」だと教わりました。当時は文字通りの意味で受け取っていましたが、今はその言葉を違うニュアンスで理解しています。育ちとは、能力の右肩上がりではなく、関係の中で起きる「変化」

そのものだ。

たとえば、友だちにずいぶん当たりが強くなってしまふ子がいます。能力の問題として見れば「自己コントロールが弱い」となります。でも関係の中で見れば、「拒否されることが怖くて、先に強く出てしまふ」という姿が見えてくる。必要なのは能力を矯正することではなく、関係を支え直すことです。発達とは、能力が上がるのではなく、関係の中で自分の居場所を少しずつ編み直していくことなのだと、私は思うようになりました。

それでも社会の空気は別の方向へ流れます。「困らないこと」を価値とし、「早く整える」「今が大事」「放っておくと取り返せない」という言葉が親を焦らせる。子どものつまずきが家庭の責任として回収されていく。不安になる夜、検索画面に「発達 遅れ」と打ち込む。そして「ちゃんと育てなければ」「私の関わり方が悪いのではないかと、自分を責めてしまふ。

あの懇談での「否定されたような気持ちになります」という言葉は、そうした孤立の中から生まれたものでした。自分なりに向き合い、悩みながらここまで来た。それなのに、書かれた子どもの姿が「足りないところの一覧」のように見えてしまふ。あれは単なる誤解ではありません。「発達は親の責任である」という空気の中で子育てをしてきた人の、正直な反応でした。

でも、子どもは一人で育っているわけではありません。家庭の中だけでなく、園の中で、友だちの中で、地域の中で育っています。だからこそ、子どもの姿を書くということは、評価ではなく、共有なのです。「こんなときに揺れやすい」「こんな関係があれば安心できる」それを次の場と共有するのは、責任を押しつけるためではなく、責任を分かち合うためです。



子どもの育ちを自己責任にしない。子育てを孤独にしない。子どもが揺れることを恐れず、親が迷うことを責めず、ともに立ち止まれる場所でありたい。

あの場に出た言葉は、決して間違いではありませんでした。その違和感を口にしてくれたからこそ、私たちはこうして立ち止まることができました。これからも子どもの姿を書き続けます。けれどそれは、誰かを評価するためではありません。

最後に、一つだけ言葉にしておきたいことがあります。

私たちが目指す園は、「誰も排除しない」場所です。



子どものどんな姿も排除しない。うまくいかない日を排除しない。迷いながら子育てをしている親を排除しない。揺れや迷いを抱えた職員を排除しない。揺れを問題として外へ追い出さない。摩擦を失敗として切り捨てない。困ったとき「ここにいていい」と思え、うまくいかないとき「一人で抱えなくていい」と感じられる場所であるということです。それは、子どもだけに向けた言葉ではありません。親に向けた言葉でもあり、職員に向けた言葉でもあります。誰かが揺れているとき、その揺れを「問題」として処理するのではなく、「そういう時期なのだ」と引き受けられる集団でありたい。

子育ては、本来、誰かと分かち合うものです。喜びも、悩みも、失敗も、迷いも。一人の子どもを育て

るのに、一人の力では足りない。それは弱さではなく、子どもが関係の中で育つ存在だという、当然のことです。そうした子育てを通して、私たち大人もまた育つのです。

保育士もまた、完全ではありません。うまく言葉が見つからない日があります。どう関わればよいか迷う場面があります。それでも、子どもたちや保護者の皆さんとの関係の中で、少しずつ自分の見方を更新していく。それが、保育という仕事の本質だと思っています。

だからこそ、私たちは「自己責任」という言葉に抗い続けます。誰かがつまずいたとき、それを誰か一人の責任にしたくない。誰かが迷ったとき、その迷いを孤独に終わらせたくない。困りごとは、共有されることで初めて、支え合いになります。

誰も排除しない。誰も孤立させない。それは、きれいな理想ではなく、子どもたちや保護者の皆さんとの関係の中で、毎日繰り返し選び取っていく、実践の言葉です。発達を自己責任にしない。子育てを孤独にしない。その歩みを、これからも皆さんとともに続けていきたいと思えます。

そうぐみのみなさん、卒園おめでとうございます。また新たな一步を踏み出す私たちの仲間を、これからも変わらず、ともに歩むパートナーとして、応援しています。そしてつばさでの生活を体験されたみなさんは、ぜひ、また近くの誰かにとってのパートナーであり続けてくれたらうれしいです。

今年度もありがとうございました。職員一同、みなさんに心から感謝しています。

※今年度をもって、烏野佳恵が本園を退職いたします。長年にわたり、子どもたちの傍らで誠実に保育を続けてきた彼女の存在は、この園の文化そのものです。子どもたちへの深い愛情、保護者への丁寧な関わり、そして全ての職員への温かい眼差し。彼女から受け取ったものをこれからも大切にしていきたいと思えます。次のページに烏野からのメッセージを載せています。

オニがきました！！



0・1歳児にも容赦なくオニはおそいかかる

自分のお腹の悪いところを持って行って～

さらわれた鳥羽ちゃんを助けに行くこどもたち

熊取商工会の方々にご協力いただきました

キョンちゃんを頼るこどもたち